商経アドバイス令和 5 年 12 月 18 日（月）第 6301 号

作況 101、主食 661 万㌧確定
最終作柄　高温障害過去最大 100 万㌶
来年 6 月末在庫 176 万㌧

農水省は 12 日、令和 5 年産水稲の最終作柄を全国作況指数 101 の「平年並み」と発表した。前回の 10 月 25 日現在から変わらず、5 年連続の平年作が確定した。主食用作付面積は 124 万 2000 ㌶(前年比 9000 ㌶=0.7%減)で、収穫量は 661 万㌧(同 9 万 1000 ㌧=1.4%減)。6 年 6 月末民間在庫量は 176 万㌧で、今年 6 月末の 197 万㌧からさらなる在庫縮減が見込まれる。

作況指数の基準となる「農家等が使用しているふるい目幅ベース」(都道府県別に 1.80~1.90 ㍉)に基づく 10 ㌃収量は 515 ㌔(前年比 3 ㌔増)。収穫量の基準となる全国一律 1.70 ㍉収量は 533 ㌔(同 3 ㌔減)で、いずれも前回と変わらず。主食用作付面積に 1.70 ミリ収量を乗じた収穫量は、基本指針の 669 万㌧より 8 万㌧少ない 661 万㌧で確定した。

農業地域別作柄は、▷北海道 104▷東北 101▷北陸 97▷関東・東山 102▷東海 99▷近畿 100▷中国 101▷四国 101▷九州 101▷沖縄 103――で、沖縄以外は前回と同じ。沖縄では、生産量は限られるものの第 2 期稲が作況 130 の高指数をマークし、県作況は前回 99 から 4 ㌽ハネ上がった。都道府県別作況指数も、沖縄以外は前回作柄と同じだった。

最終作柄で初めて公表された水稲の気象被害・病虫害など被害概況(=同一地域における複数被害は重複計上)では、「高温障害」面積が全国で 99 万 4000 ㌶に達し、「日照不足」面積の 84 万 5200 ㌶を上回って 1 位被害となった。被害面積では日照不足が最も多いのが毎年の通例で、高温障害が日照不足を抜き去るのは極めて異例だ。

水稲の被害統計で高温障害が単独項目として区分され、被害分類がいまの形になったのは平成 14 年産から。それ以降で高温障害面積が最も大きかったのは、昨年まで歴代 1 位の猛暑年だった平成 22 年産の 97 万 7500 ㌶ だった。今年は 22 年を大幅に上回る史上最高猛暑として記録を塗り替えた中、高温障害面積でも 22 年産を上回り、過去最大規模の約 100 万㌶に上った。直近 10 年では令和元年産 69 万 9200 ㌶、平成 30 年産 65 万 3300 ㌶を大幅に上回った。

被害量でみると、日照不足の 19 万 2700 ㌧が高温障害の 19 万 2300 ㌧をわずかに上回った。その他被害では、▷イモチ病 20 万 4900 ㌶・4 万 5700 ㌧▷カメムシ 17 万 6700 ㌶・2 万 5000 ㌧――が多かった。

最終作柄では 5 年産陸稲(子実用)の動向も公表され、作付面積 401 ㌶(前年比 67 ㌶減)、10 ㌃収量 208 ㌔(同 8 ㌔減)、 収穫量 835 ㌧(同 175 ㌧減)となった。茨城が全国陸稲作付けの 75%、栃木が 24%を占めている。